

10月11日(日) 主日礼拝レジュメ

「一人の特別な求道者」 使徒の働き 8章26～35節

サマリアでの宣教の後、今度はピリポの二度目の宣教への導きがあった。

26節で主の使いがピリポに、「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」と言われた。「そこは荒野である」ということなので、ガザはハスモン朝の王であったアレクサンドロスヤンナイオスにより紀元前98～96年に破壊された古いガザか？その一方でガザに出るには、エルサレムからヘブロンへ行き、そこから西へ向かうのだが、その道がまさに荒れている地、荒野を通るという考え方もある。

27節「そこで、ピリポは立って出かけた。」から私たちが教えられること。

1) 主ご自身が宣教の主である。

つまり宣教は主のみことろと主の計画によりなされる。

2) 必ず人を用いられる。

27節「すると見よ。そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、帰る途中であった。」とある。宦官とは去勢された人物である。

① 申命記23章1節で「睪丸のつぶれた者、陰茎を切り取られた者は主の集会に加わってはならない。」

さらに彼は異邦人だった。つまり、この宦官は律法により礼拝への出席が禁じられた異邦人だったが、それでも彼は礼拝のためにエルサレムに上って行った。また28節「彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた」とあり、主を恐れ、これほどまでに熱心に主を求めていた人物であった。

29節で聖霊が「近寄って、あの馬車と一緒に行きなさい。」とピリポに言った。そして30節でピリポは宦官に「あなたは、読んでいることが分かりますか。」と尋ねた。31節でこの宦官は謙遜に「導いてくれる人がいなければ、どうして分かるのでしょうか。」と答えた。ピリポはこの宦官の言葉を聞いた時に、神は何のために自分をこの所へと導いたのか分かったのではないか。この宦官を救いへと導くためにピリポを備え、またピリポを御霊と知恵とに満たして、この宦官を正しく導くようにされた。

32, 33節はイザヤ書53章7, 8節の引用。ここに描かれているのは、沈黙している苦難のしもべである。「屠り場に引かれて行く羊のように」「毛を刈る者の前で黙っている子羊のように」と犠牲のいけにえにされようとしている羊にしもべが例えられている。33節に「彼は卑しめられ、さばきは行われなかった」とありますように、不当なかたちでこのしもべは殺されることとなり、34節で宦官は「お尋ねしますが、預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」と尋ねた。35節「ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。」とあり、イエスが不当な裁判により、罪ある者とみなされ、十字架への道を歩まれ、それは、ささげ物とされた羊が民の罪を贖ったように、イエスご自身も十字架で流された血により民の罪を贖った。33節「彼のいのちは地上から取り去られたのである。」とあるとおりに、イエスは確かに十字架の上で全人類の罪を贖うために、彼のいのちが地上から取り去られたが、三日目に死からよみがえられた。まさに、このお方こそが旧約聖書で預言されたまことのメシヤだということをピリポは語ったのだろう。「御霊と知恵に満ちた」ピリポの知恵は、サマリアで人々にキリストを宣べ伝え、そして宦官にイザヤ書53章からイエスの福音を彼に伝えた時に現れた。なぜなら、聖書が教える知恵は、この世の知恵ではない。

②コリント人への手紙第一 1 章 2 0 節「神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。」

③コリント人への手紙第一 1 章 2 4 節「ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」

キリストこそが神の知恵であり、知恵に満たされていたピリポは、この神の知恵に満たされ、神の知恵であるキリストを人々に適切に宣べ伝えることができた。この知恵を与えるのは、みことばであり、私たちの内に住む聖霊。聖霊を内に宿すすべての人が、牧師でなくても、特別な訓練を受けていなくても、聖霊により神の知恵であるキリストを宣べ伝えることができる。

ピリポは、エチオピア人の宦官の存在は知らなくとも、神が彼のことを知っておられ、この人がまことの救い主であるイエスを信じるために、この人のもとへピリポを遣わされた。私たち一人一人も家庭や職場、地域、それぞれの場所に遣わされているが、そこで私たちは主を証しし、イエスを宣べ伝えよう。主が、救いへ導こうとしている魂がそこにあることを信じて、祈りつつ主を証しする者たちでありたい。